人情本にみる近世後期の服飾文化

―芝居、書画にかかわる趣向―

大久保　尚子

近世後期の服飾には芝居や書画にかかわる文様意匠の趣向が様々な形でみえるが、その成り立ちについては明らかでない点が多い。ここでは人情本を主な手掛かりとして、これらの性格や成立背景を探り、服飾文化と同時代の芸術文化とのかかわりについて考えてみたい。

天保期の為永春水らの人情本の本文や挿絵を検討すると、現実味ある人物像、生活空間と共に特徴ある服飾の趣向が描き込まれていることに気付く。中でも目立つのが芝居や書画にかかわるものである。人情本中の表現は、これらの趣向がどのような人々の間で、いかなる文化的背景の下に生まれたのかを考える上で示唆に富んでいる。以下、為永春水の人情本作品を中心に、その他の文献資料や絵画資料も参照しながら、文政、天保期の服飾文化の成り立ちを芝居や書画とのかかわりからとらえてみたい。

1. 芝居の趣味にかかわる趣向

近世後期、特に文化期以降には、役者好みの染織意匠が広く流行したことが知られている。有名な例に市川団十郎の「かまわぬ」や「三筋に蝙蝠」の文様等があるが、ここでとりあげたいのは一般への流行の拡大ではなく、贔屓連中など、芝居に対して格別な趣味を持つ人々が、どのように自らの趣味にかかわる趣向を楽しんでいたかという問題である。

○「東連」にかかわる趣向

芝居の趣味にかかわる趣向として天保期の人情本の中で興味深いのは、四世坂東三津五郎の贔屓連中「東連」に関する例である。為永春水の『春告鳥』初編（天保七年刊）には三津五郎や「東連」に因む文様が多様な形であらわされていることが注目される。巻之二には、向島の寮で閑雅な日々を送る若隠居、鳥雅が、思いを寄せる深川芸者のために好みに任せ誂えた衣装について次のような描写がある。着られる折りなくしまわれていたものを、侍女のお民に着せてみようとする場面である。

> そも好みに任せてこしらへ置たる衣裳の染色はいかにといふに、千筋の山まゆ縮綿の御納戸、…裾へ銀糸にてまことに細かに八藤をちらしに付、下着は京縮綿へ藤色にて吹寄の形を染たる無垢二ツ、緋の紋ちりめんの対丈繻伴、白天鵞絨へ銀糸にて三津五郎縞を縫せし半衿をかけ、…媚茶の紋ごはくへ黒糸と紫の糸にて三津五郎縞を蛇腹ぶせに縫はせし九寸巾の帯、もつとも鯨合せ、片めんは松葉色の勝山へ金糸にて八ツ藤を五分ほどの大きサに縫はせ、もつとも六七寸間に飛々に付たり。

全体の取り合わせと同時に細部にも心が配られた凝った一揃いの中で、半衿と帯とに繰り返し「三津五郎縞」が用いられており、何らかの意図が感じられる。「三津五郎縞」とは、三世および四世三津五郎を描いた芝居絵等にみえる三本と五本の斜め格子縞（参考図 袖無羽織の文様を参照）のことかと思われる[1]。半衿には白天鵞絨に銀糸の縫い（刺繍）で、帯の片面には媚茶色の紋琥珀地に黒と紫の蛇腹糸の伏せ縫いで、「三津五郎縞」があらわされている。ここでは「三津五郎縞」は流行の役者文様を染めた出来合いの染め物等とは違い、独自性の高い凝った形で意匠化されている。

この鳥雅という人物は、三津五郎の贔屓連中「東連」の一員という設定であり、このことと「三津五郎縞」の趣向は関連すると思われる。右の描写の前後では、他にも、替紋である「梶の葉」、「花勝見」(参考図 下着の文様)など三津五郎に因む文様が挿絵や本文を通して鳥雅の身辺に描かれている。例えば、湯上がりのお民が鳥雅のものを借りてまとうのは、「白地の浴衣もぱちぱちと京花染の梶の葉にて」と、梶の葉文様を染めた浴衣である。これに合わせて挿絵では、図1のように大きく「梶の葉」を散らした浴衣をまとったお民が描かれている。他に挿絵では、図2のように「花勝見」を鳥雅自身の紋である「重ね桔梗」と組み合わせ、更紗を思わせる構図にまとめた暖簾、「花勝見」文様の小ぎれで作った糠袋などがみえる。中でも、「東連」の印(瓢箪形の大の字の中に東連の文字)を染めた手拭いは繰り返し登場し(図1、2)、鳥雅が「東連」にかかわることが暗示されている。これらは鳥雅が贔屓の三津五郎に因む意匠を身辺に用いている様の描写であるが、いずれも日常生活によく馴染んでおり、また意匠や素材、染めなどに、創意と独自の好みを感じさせる。これらと並べれば先の衣装の「三津五郎縞」も、鳥雅が馴染みの芸者に贔屓役者に因んだ趣向の座敷着を誂えたものと受け取ることができる。

鳥雅が「東連」の連中であることは、これらの服飾が本文や挿絵にさりげなく登場した後で初めて明文化される。不意の来客に困惑する鳥雅に向けた、「東連の御見物のことで御相談いたしたふございますから、是非今日御立寄をお願ひ申ますと、先刻お使ひが参つております」という、お民の機転の一言がそれである。しかし、これ以前に右に述べたような挿絵や服飾描写の趣向に気づいた読者は、この設定を知ることになり、これらの服飾描写や挿絵は、物語を読み進める上での趣向ともなっていることがわかる。

なお役者評判記を参照すると、「東連」は天保期、四世坂東三津五郎の贔屓連中として実在したことが確かめられる。天保四年刊『役者四季詠』の四世坂東三津五郎評に「頭取『当時町中ひゐきつよき日出の大和や当三月中御改名といひ此度ふきや町初座頭祝ひに一ツ〆ませふ　東連 かつみ連『シヤンシヤンシヤンシヤン」と、また同六年刊の『役者現銀店』にも「頭取『仕切場に土間も桟敷もうり切レてかゝる霞の春の大和屋秀調丈でござります　東連『待て居ましたサアサアはやく評が聞たい」と、「東連」は登場している。

「東連」及び三津五郎に関する話題や事物は、他にも天保期に書かれた春水や曲山人の人情本作品に色々な形で登場するが、それらは、現実の「東連」とのかかわりで取り上げられた趣向であると考えられる。趣向の背景を考える上で特に注目される例としては次のようなものがある。春水の作品では『春告鳥』が最も多くの趣向を含んでいる。この作品では服飾に関するものの他に、口絵に三津五郎の発句が寄せられていることなどからも、東連に関する話題や趣向は単に部分的な構想に止まらない現実とのつながりを持つと理解される。また曲山人の『娘消息』一、二編(天保五年刊 柳川重信画)に東連にちなむ文様意匠が多出することも注目される。図3にあげた初編上之巻挿絵の水茶屋の情景では、右側の娘お初に「東連」の印を散らした浴衣と「東連」その他の印尽くしの帯が、左側の水茶屋の女房お仲に「花勝見」模様の前垂れが描かれており、背景には「東連」の団扇、「東連」の印を押した煙草盆がある。他にも挿絵中に「東連」に因む意匠が多くみえるが、特にこの水茶屋の情景に集中しており、実在の人物や店との関連が想像される。更に、図4にあげた表紙意匠にも染付の器物の散らし文様の中に「東連」の印と「梶の葉」文様の付いた猪口が表されていることが指摘できる(題簽の「文」の字の右側)。趣向が表紙意匠にまで及んでいることは、その成立背景を考える上で興味深い。

以上のような諸作品に見られる細部は、現実の「東連」の人々が日常の中で役者好みの意匠の趣向を様々に案じ、楽しんで用いた様を反映するものと考えられる。また天保期の春水と曲山人の一部の作品に繰り返し登場することから考えても、これらの趣向は作者とつながりのある「東連」関係者とのかかわりで描かれた可能性が高いと考えられる。このことに関して、粋興連、興笑連の三題噺集である『粋興奇人傳』(仮名垣魯文、山々亭有人編 文久三年序)文桂舎栄寿の項に、

父は一派の洒落人にてありしむかしはあづまれんの大棟梁たり

とあることが注目される。文桂舎栄寿は書肆文渓堂丁子屋平兵衛であり、ここでいう「父」の代に『春告鳥』や『娘消息』の版元となっている。版元の文渓堂が「東連」の中心人物であったことと、右のような趣向とは、何らかのつながりを持つと考えられる[2]。

なお四世三津五郎の役者絵に、「東の連五郎」の名で、表は「三筋に東の字」裏は「三筋に五の字」の長半纏姿の鳶の者を描いたものがある(歌川国芳画「あつまの連五郎 坂東三津五郎」図5)。背景は手拭店で「東連」に因む各種の手拭地が描かれており、中には人情本の挿絵同様の意匠もみえる。恐らく「東連」とのかかわりで出版された作品と考えられる。このような役者絵の存在と人情本の描写を考え併せると、役者好みの文様意匠の展開に、贔屓連中が少なからず関わったことが推測される。

2. 書画にかかわる趣向

○「印尽くし」、「寄合書き」の趣向

次に書画にかかわる様々な趣向のうち、まず、比較的共通性のある「印尽くし」と「寄合書き」という二種の趣向について考えてみたい。

はじめに書画などの印を集め文様とした「印尽くし」の意匠に注目してみる。「印尽くし」の意匠は、人情本に、また文政から天保頃を中心に浮世絵にも多様な形で表されており[3]、趣味人やその周辺の女性たちの間で好まれていた様子や、趣向の性格が窺われる。人情本中には多くの例があるが代表的なものとしては、為永春水作『春色梅児誉美』初編巻之三(天保三年刊)挿絵にみえる、深川芸者となった米八の「印尽くし」の意匠の帯(図6)、また同二編巻之六(同年刊)、娘義太夫となったお長の流行を穿った装いの描写にみえる「白綾に朱紅で書画の印づくし」という襦袢の半襟などがあげられる。これらの例からも「印尽くし」の意匠は、凝った趣味的な好みのものとして注目されていた様子が窺われる。

さらに、同じく為永春水の『祝井風呂時雨傘』二編巻之四(天保九年刊)には、印尽くしの染め模様の誂えについて興味深い内容が語られる次のような場面がある。

若い者「へい、お誂への品が、漸々出来上りました。」銀河「オヽ御苦労々々。何様だね、染が奇麗に揚つたかね。」若い者「へい、染屋が良山堂様へお心易く出入りを致しますゆゑ…印章の形を頂きまして、写真に染めました。」…銀河「…いや染上りは申分なしだ。」…銀河「さあお幾さん、此間のお約束だ。上着はお前が欲しいと言ひなすつた琉球紬、下着は白縮緬を選んで、私が案じた新形だよ。」

通人銀河が水茶屋の娘お幾に誂えた衣装が届き、これを示す場面だが、「白縮緬を選んで、私が案じた」という下着の「新形」の染め文様が「印尽くし」である。呉服屋の若い者のせりふからもわかるように、ここでは「印尽くし」の文様は、篆刻の名手「良山堂」先生の下で種々の印章の形を写して染めたという設定である。元となったのは良山堂の作品か、その収集になる印譜か、いずれにせよ印影自体が鑑賞

の対象となる優品ということになる。印章は小世界の中に表現が展開されるものであり微細な差異が問われる。それ故「写真(しょううつし)」(実物の姿をそっくり写すこと)にすることに意が用いられ、優れた印影そのままの染め上がりが評価されることがわかる。この試みは「洒落た思ひつき」、「誠に風雅な出来等と言われている。また新染めを案じた銀河自身「風雅なる人」とされている。この例からは、「印尽くし」の意匠は人々の文雅の趣味から生まれたものであり、落款に精通し印章を吟味する、といった書画への接し方が背景にあることが窺われる。なお良山堂とは同時代の実在の篆刻家阿部良平(良山)を当てたものと考えられる[4]。良山堂を知る読者には、この染め模様についても、具体、個別の印影が想起されたものと思われ、実在の優れた印影を写すことに妙味を味わう、という趣向の性格が見てとれる。

こうした「印尽くし」の意匠は、浮世絵の例では印影の文字まで丹念に描かれることが多く、意図するところが具体的にわかる。中でも歌川国貞画「柳下美人図」(図7)の白地に藍で狩野派の印を染め表した例のように、実在の絵師の印を写したものがみられることは注目される[5]。また和更紗の遺品にも「印尽くし」文様の例があるが、図8にあげたもののように、やはり光琳など著名な絵師や書家の印を模した意匠がみえる。これらの例からも、印尽くしとは、絵師や書家、或いは篆刻家等の実在の印を写し、印影から書画等の世界を想起させるところに本来の趣向があったと考えられる。

「印尽くし」と並んで注目される趣向に「墨絵の寄合書き」がある。「寄合書き」とは複数の絵師が同一画面に各々揮毫した作品をいい、そのような形式を衣服に盛り込んだものである。一例として為永春水作『園の花』三編巻之中(天保九年刊)の、主人公半七の夢に現れる腰元浦次の芸者風の装いの描写をあげてみる。

> 黒袷子に大柏の紋を菅縫にして裾は白くしぼりしごとくに染墨絵の笹の寄合画諸所に朱紅にて其画師の花押を染…

黒斜子地紋付きの小袖の裾を白く染め残し、幾人もの絵師による墨絵の笹の寄合書きを施して裾模様としたものである。服飾に墨絵を施すことは古くからあるが、ここでは「寄合書き」という形式で何人もの絵師の趣の異なる筆を集めたことが趣向となっている。意匠の一部であるかのように花押が注目されている点も特徴的であり「印尽くし」の意匠との類似性が認められる。こうした「墨絵の寄合書き」も「印尽くし」同様、一部の趣味的な人々の間で注目されていたものと思われる。

「寄合書き」の文様の例は、同時期の浮世絵に描かれた服飾や染織図案集にもみることができる。貞斎泉晁画「美人今様姿」の墨蘭、墨竹の寄合書き風の帯(図9)、葛飾戴斗(二世)『万職図考』(天保六年刊)中の「寄合書見立」と題した帯の図案(図10)などがそれである。これらの例は、本来の墨絵の寄合書きというよりも、「寄合書き」を意匠化したものと見受けられる。

これら「印尽くし」や「寄合書き」などの趣向は、人々の書画への親しみを背景とするものと考えられるが、文政、天保期における書画享受の様相には、具体的にはどのような特徴がみられるだろうか。人情本の挿絵や本文中の描写には、遊里や趣味人の住まいはもちろん広い層の人々の生活空間に琳派から浮世絵版画までの様々な絵画や書が、軸や屏風、襖等の形で登場することが指摘できる。これは現実の書画鑑賞の裾野の広がりを反映するものと考えられる。さらに、この時期に特徴的な事象として書画会の流行がある。その様相について、同時代の随筆は、「近来書画会所々の料理茶屋に於て催す事、四時絶る事なく盛りに行はる」(喜多村信節著『嬉遊笑覧』文政十三年序)、「芸妓のいづるといふ事は近

頃の事なり。寛政より享和の頃までは、此事あまりなかりしが、…文政年中にいたりては、甚敷事になり」(畑銀鶏著『南柯乃夢』天保六年刊)等と伝えている[6]。文政から天保頃に盛んに行われた書画会は、専ら料理茶屋での芸者を交えた酒宴の形をとった遊興色の濃いものであったことがわかる。

「印尽くし」や「寄合書き」等の意匠が目立つのは、書画会が盛行したのと同時期のことであり、これらは書画に対する趣味が遊興と一体化する中で試みられたものと考えられる。先の図6に「印尽くし」の例としてあげた『春色梅児誉美』の深川芸者米八について、同書二編口絵には「そも流行に心をつけて、高名書画の花押にくはしく、風流の雅筵に招かれ…」という賛詞がみえる。風流の雅筵とはまさに書画会等のことであり、自ら書画に精通しているような芸者がそうした席で持て囃されたことがわかる。こうした芸者の衣装に「印尽くし」や「寄合書き」などの趣向が喜ばれたのも尤もなことであり、殊に墨絵の寄合書きについては、実際、書画会等の席で描かれることが多かったと考えられる。

○著名絵師の絵を「写真(しょううつし)」にした趣向

近世後期の服飾には絵画性の高い文様意匠が広く行われている。優れた例として、三井家伝来の、円山派下絵とかかわる小袖類(参考図に一例を示す)があるが、このように絵師や絵画作品との関係がわかる遺品は稀である。これに対し人情本には、著名絵師の画業を染めや刺繍によって写し文様とする趣向がみえ、服飾と絵画との関係を考える上で注目される。これらの趣向は絵画の世界とどのようにかかわるのか。ここでは『春告鳥』五編巻之十四(天保八年頃)、お熊の描写にみえる、同時代の文人画家、谷文晁の絵を写し帯の文様とした、という例を通して考えてみたい。お熊は芸者上がりの洗練された中年増、通人の恋人を持ち自らも書画会等の事情に通じている、という設定である。

> 黒紬の紋付の花色裏、御納戸の米沢博多の無地へ媚茶の糸にて織止を縫せ、文晁先生の画を写真にしたる蝶に菜の葉を色糸にて縫ひ、紫の蛇腹糸をもつて発句を縫せし帯を結び、下着はせんさい茶の色にて梶の葉の二分ぐらゐの大きさの小もん縮緬、惣地は白茶なり。…上品よく目に立ぬ衣裳着、こゝろをつけてよみ給はゞ、梅里が迷ひしももつともなる女と察せらるべし

控えめな中に細部への繊細なこだわりを見せ、注意深く見れば非凡な趣向が見る者の心を奪う通好みの装いが描写されている中で、とりわけ異彩を放っているのが「文晁の絵を写真にした」という帯の趣向である。御納戸色無地の一見目立たぬものだが、端の方に織止(織り端を示す線)を象った線を縫い表し、その近くに谷文晁の絵を「写真(しょううつし)」にした蝶に菜の葉の図と発句を刺繍したものと考えられる。

造形表現上の特質を考える上で注目されるのは、先に「印尽くし」の例にもみえた「写真(しょううつし)」という語である。この語は近世の画論用語であり、絵画史研究によれば、18世紀には実物の真の姿ををそのまま描き写す行為を「写真」と言っていたと考えられる[7]。また「写真」には他者による真写図を模写する場合も含まれる。そして工芸において基となる絵の表現を出来る限り再現的に工芸の手法に置き換え表すこともまた「写真」と言われることが、この例から理解される。ここでは文晁の絵に基づき、恐らく筆致や色彩などをも含めて元の絵画表現を刺繍に置き換え表そうとしたものである。

元となる絵について、ここでは「下絵」とは言われておらず普通の絵画作品から趣向を案じたものと考えられる。文晁の画業は多岐にわたっているが、発句との組み合わせから考えれば俳諧や狂歌の賛を伴う小品の世界が思い浮かぶ。このような形式で、とりわけ広く親しまれる機会があったのは俳諧や狂

歌の愛好者たちが作る摺物である。近い画題の文晁作品として、「鼓草に蝶」の図の狂歌摺物があげられる(図11)。

絵画を写す趣向の成立背景を考える上でも、摺物とのかかわりは注目される。このような趣向を案じた人々、すなわち通人たちやその周辺の女性たちが絵画に親しむ上で、摺物の製作や鑑賞は大きな比重を占めていたと考えられる。天保期の春水人情本には、これらの人々が狂歌や俳諧の嗜みを持ち、摺物を作って交換しあい、身近に鑑賞することを楽しみとした様子がしばしば描かれる。一例として、為永春水『春色梅美婦祢』第四編巻之十(天保十三年刊か)の趣味人たちの集いの場である寄合茶屋の情景を参照してみたい。

> お京は壁の方へ向て、狂哥俳諧の摺ものゝ、張まぜの様に張たるをながめて居る。書画の大人の会日、あるひは俳諧の題をしるした月並みの法條そのほか番附など張てあり。京「ヲヤヲヤ何れも奇麗な画だねへ。その中でこれが一番能ねへ。」くめ「何れへ。」京「これサ、此画が寔にいゝねへ。」…くめ「アヽ、それは山しろ河岸の藤さんといふ旦那に貰つたのだヨ。毎年奇麗な摺ものをお拵だとサ。」京「ヲヤ左様かへ。峯さんも狂哥をお詠だ子へ。」くめ「アヽその柱かくしは峯さんだヨ。」京「ヲヤヲヤこれがかへ。」くめ「イヽエそれは文亭さんといふお方のだヨ。其次が峯次郎さんのだは。」

壁に貼られた美しい絵入りの狂歌俳諧の摺物が話題にされ、その作者として、春水の友人の狂歌師文亭綾継や、パトロン的存在であった通人津藤をあてた人物(山城河岸の藤さん)名があげられている。挿絵にも草花を描いた小品の壁に並んだ光景がみえる(図12)。このような摺物の愛好は、絵画を写す趣向の成立に直接間接にかかわったものと考えられる。

また、絵画作品を写して装飾とすることは、衣服以外の器物や持ち物にも行われたようである。松浦静山『甲子夜話』巻六十一(文政八年執筆か)には、文政後期より、同時代の著名絵師や書家の作風を写した書画の小品を酒器や団扇の意匠とすることが、一部に流行していたことが伝えられている[8]。

> 当時は酒杯の代りに陶器のちよく大に行はれ、夫に画を焼つけたるに、文晁、抱一共に画に巧なるに因て、その名を仮ざるはなし。又夏の団扇に書画を版にせしにも、鵬斎、天民、五山と題せる多し。

書画会や摺物愛好などを通して拡大した書画への親しみは、このような身の回りの様々な品々の装飾にまで書画を取り入れる流行を生んだと考えられる。「文晁先生の画を写真にした」帯のように著名絵師の作品を服飾の文様意匠として写す趣向も、この同じ流れの中に位置付けられるものと考えられる。

以上に取り上げた各種の趣向は、あるいは役者とその贔屓連中を想起させ、あるいは絵師や書家の作品や印を写すというように、いずれも芝居や書画の世界にかかわる特定の個人や集団と結び付いている。このような趣向は、天保期の人情本に描かれているような通人や趣味人、芸者などの間で、芝居や書画への親しみと遊興の混交の中から生まれたものと考えられる。殊に為永春水の作品は人々の交遊を現実を交えて描いており、作中の服飾の趣向とその背景についてもかなりの程度現実を反映していると受けとられる。これらの趣向は、同時代の絵画や文献資料、また遺品にも類例をみることができ、一般への拡大が窺われるが、人情本に表されているのは中でも上質な表現であり、いわば趣向の原点を伝えるものと考えられる。この点から人情本の読者層について考えれば、このような趣向を隅々まで楽しみ得た

限られた層の人々と、そうではない人々に分かれるのではないだろうか。

上質な例に限れば、ここにみた服飾文化の享受者と関連する芸術文化の享受者とは重なっており、芝居や書画に関する服飾の趣向を凝らすことは、時に、演劇や美術の楽しみ方の一変化形でもあり得たと思われる。また服飾文化は享受者個人との結び付きが明確であり、これに注目することは、同時代の文化を享受史の観点から解明していくことに資するものと考えられる。

(本稿は、拙著「人情本にみる趣向と流行－芝居と書画をめぐって－」「服飾美学第27号」平成10年３月、「近世後期の服飾と絵画とのかかわりに関する一考察－人情本、浮世絵、絵手本にみる絵画的意匠の展開－」「服飾美学第29号」平成11年９月末発行予定、でとりあげた内容の一部を発展させ、新たな考察と資料を加えたものである。)

【注】

(1) 旧稿では「三津五郎縞」を「三つ大縞」と同一視する従来の解釈に従っていたが、意匠の性格からみても別のものと考えたい。なお参考図は細部の明瞭なものに差し替えた。

(2) 天保期文渓堂に勤めた大島屋伝右衛門の回想(「文渓堂と八犬伝(下)」「高潮」第４号明治39年５月)にも、丁子屋の主人が4世坂東三津五郎と坂東しうかを贔屓にし「東連といふ連中を造り自ら其頭取となつて居た」とあることに、発表後気づいた。

(3) この意匠は明和安永頃にも例があるが、当期には、より広い層への拡大が窺われる。

(4) 阿部良平は『続浪華郷友録』(天保８年刊)、『浪花当時人名録』(嘉永元年刊)にみえる。『良山堂印譜』、および『良山堂茶話』その他の著作がある。

(5) 「柳下美人図」の例につき狩野派への憧れなど国貞の意識とのかかわりを推測した解釈も提示されているが、基本的にはこの時期に実際行われた趣向を示していると考える。

(6) 『嬉遊笑覧２』『日本随筆大成別巻８』(吉川弘文館 平成８年)、『南柯乃夢』『日本随筆大成第２期20』(吉川弘文館 平成７年)による。

(7) 佐々木丞平、佐々木正子『円山応挙研究 研究編』「Ｖ絵画思想解析研究 第２章写生について 第３節真写と生写」(中央公論美術出版社 平成８年)を参照。

(8) 『東洋文庫 甲子夜話４』(平凡社 昭和53年)による。

注記以外の引用資料出典は次の通りである。『春告鳥』は『日本古典文学全集47』(小学館 昭和46年)に、『春色梅児誉美』は『日本古典文学大系64』(岩波書店 昭和40年)に、『祝井風呂時雨傘』は『人情本刊行会 郭の花笠 祝井風呂時雨傘』(人情本刊行会 大正４年)に、『春色梅美婦祢』は『岩波文庫 梅暦下』(岩波書店 昭和29年)によった。その他は原本によった。

参考図　歌川国安
「重年花源氏顔鏡山がつ熊王実は鷲尾三郎義久坂東三津五郎」
（文政10年11月）

図1　『春告鳥』初編巻之三　16ウ
（天保7年刊　歌川国直画）
東北大学附属図書館狩野文庫蔵

図2　『春告鳥』初編巻之三　4ウ
（天保7年刊　歌川国直画）
東北大学附属図書館狩野文庫蔵

図3　『娘消息』初編上之巻　6ウ7オ
（天保5年刊　柳川重信画）
国会図書館蔵

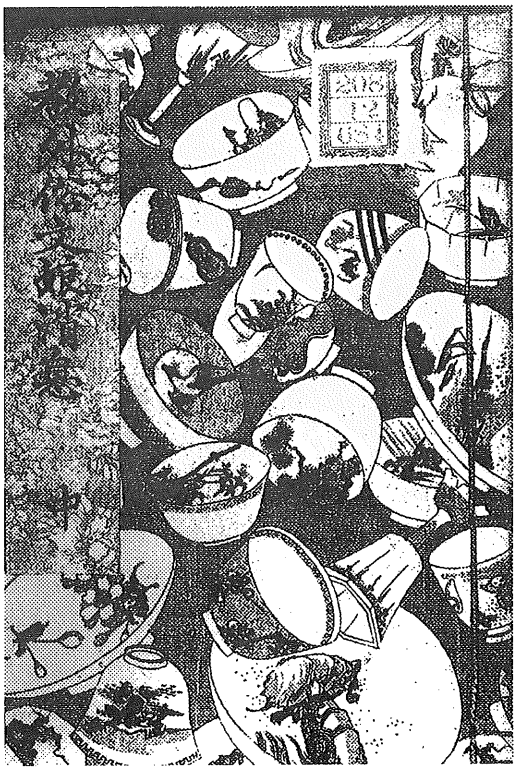

図4　『娘消息』初編中之巻表紙
（天保5年刊）
国会図書館蔵

図5　歌川国芳
「あつまの連五郎　坂東三津五郎」

図6　『春色梅児誉美』初編巻之三　6ウ7オ
（天保3年刊　柳川重信画）
東北大学附属図書館狩野文庫蔵

図7　歌川国貞「柳下美人図」
（天保）

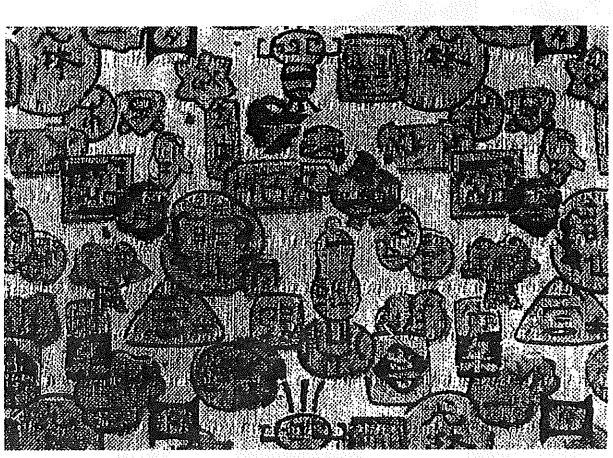

図8　和更紗の遺品
（吉岡常雄編『和更紗紋様図鑑』京都書院
平成8年　所収）

図9　貞斎泉晁「美人今様姿」

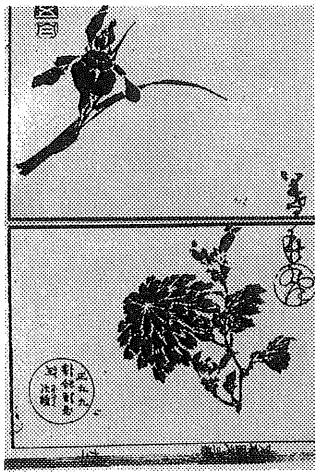

図10　葛飾載斗（2世）『万職図考』
第三編22ウ23オ（天保6年刊）
「寄合書見立」（帯の図案）
東北大学附属図書館狩野文庫蔵

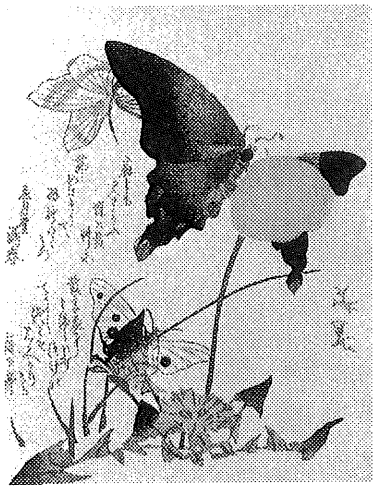

図11　谷文晁「鼓草に蝶」(文政天保)

参考図「紺繻子地竹尽文様繍振袖」

図12　『春色梅美婦祢』第四編巻之十
（天保13年刊）
東北大学附属図書館狩野文庫蔵